全市民的運動を

〝石炭守れ〟と市長に要請

大牟田の街を守る実行委員会

「石炭つぶすな大牟田の街を守る実行委員会」（城之内義観代表＝大牟田地評・住みよい大牟田をつくる市民の会・臨調行革反対県連絡会議・三池労組・市職労・社会党・共産党などで構成）は、三井石炭の合理化問題を重視して運動に取り組んでいますが、五月二十三日、塩塚公一大牟田市長に対し同委員会の代表が要請書を手渡すと同時に、当面の市の対応をただしました。

この要請の中で、城之内代表はじめ小野市職労副委員長、下川県議、田口三池労組書記長らが「今回の合理化は炭鉱に働く人ばかりでなく大牟田全体の浮沈にかかわる」「危機的状況を迎えている中で市としての運動を起こすべきだ」「企業への働きかけが必要では」「〝黒い手帳〟の条件の緩和」「需要対策と石炭守る超党派の運動を」などを指摘しました。

塩塚市長への要請（左端は田口書記長）

塩塚市長は「憂慮すべき事態だと認識している。機会あるごとに取り組み、市民の声を聞いて盛り上げていきたい」と答えました。

要請書

貴職におかれましては市民生活向上のため多忙な毎日をお過ごしのことと存じます。私たち市民は、長期間の不況の中で雇用不安、生活不安が続いています。このような状況の中で三井石炭社は昨年五百名以上の合理化を行ったにもかかわらず、再度七百三十名にのぼる人員合理化を提案しています。

このような合理化を「国の政策だから仕方がない」「生き残りのために」といって、雇用対策や地域対策もないまま容認していけば、炭鉱で働く人々はもちろん、大牟田市民をはじめ周辺住民の死活問題になってきます。

大牟田市をこれ以上衰退させず、市民が安心して働き暮らせるよう、貴職が左記の件について国や県、企業に働きかけるとともに、市独自としても対策をとっていただくよう要請致します。

記

一、第八次石炭政策に伴う生産縮小、人員削減をヤメさせ、国内炭の維持存続をはかる政策に転換するとともに、炭鉱で働くすべての労働者の、雇用対策、地域対策を十分行うよう国、企業に働きかけて下さい。また、三井石炭社が今回提案した合理化案は撤回し、少なくとも基準退職という定年退職の前倒しはヤメさせ、併せて、下請け、関連労働者対策を本工並みに行うよう企業を指導して下さい。

二、三井石炭社に対して企業の社会的責任において、親会社の三井鉱山の遊休地を解放させ有効活用を行い、新規事業の開拓、企業誘致など雇用の拡大に努力するよう指導して下さい。

三、昨年の合理化で五百名以上の人が退職し、その中で再就職できたのは百名程度です。

再就職ができるような職業訓練の制度、設備が充実するよう国や県に働きかけて下さい。また「黒い手帳」雇用保険の「特定不況地域による延長分」の受給について職業安定所の締めつけが強まっています。安心して働ける就職が決まるまで受給できるよう関係当局に働きかけて下さい。

四、大牟田市も雇用拡大のため企業誘致をより一層強化するとともに、民間企業による雇用拡大だけは抜本的解決に至る状況ではないため、一家の生計の柱として働ける新たな「公的就労事業」を起こすよう国や県に働きかけて下さい。

五、雇用対策をはじめ、労働行政を充実させるために、既存組織の見直しを行い、国や県との連携を強化して下さい。

六、「石炭のある街」から「石炭もある街」へということで大牟田の街づくりが進められていますが、三井石炭社は再々度の合理化を来年も行うという報道もされています。

大牟田における石炭産業の影響を再調査し、市民が安心して働き暮らせる展望をあきらかにし、その実現に向けて市民全体が参加する市民運動を起こして下さい。

七、その他

× ×

なお、この要請には後日、文書で回答が出されています。

四山鉱の歴史の中から

第十回

強制連行朝鮮人

武松輝男

戦時中の軍需物資であった「石炭」の増産に、辛酸をなめながら重筋過重労働を強いられたものに強制連行朝鮮人がいる。

この朝鮮人たちの労働と生活について語らいをしているときに、きまって、三池炭鉱という残忍な歴史の上に成り立ってきた、その道すじを、憤然とした気持で振りかえるときがある。

昭和十九年、第二次世界大戦に呼応するように進められてきていた万田坑と三川坑との坑内貫通工事中に起きた「万田・三川坑内火災」などで、百六十四人が死亡した。この死亡者の中に朝鮮人が含まれていたということ。

昭和三十八年、「三川鉱炭じん爆発」で四百五十八人が死亡したこと、それに、昭和五十九年、有明炭鉱を吸収合併したあと、七年目に起きた「有明鉱坑内火災」で八十七人が死亡したことなどである。

前述した十九年以降、毎年一人から九十九人までの死亡者を出しながらの、前掲の三例である。

普通の太陽の陽のもとに晒け出された工場であるならば、とうの昔にその存立すら疑われたであろうに。それが政府の手厚い庇護のもとで、炭鉱界を睥睨しながら傲然と、その存在を主張していけるというのは、いったいどういう会社なんだろう。人間性というのをすべて捨てることができたからか。それとも、冷徹な支配能力だけを突出させたからか。

これらは戦時中から戦後にかけてのことである。戦前はどうであったか。囚人を昭和五年まで、五十年近くも酷使し、与論島民を無権利のまま同じくらいの期間使役し、さらに強制的に連行してきた朝鮮人・非戦闘員俘虜（中国人）と俘虜などを、これまた非人間的な取り扱いのもとで重筋過重労働に使役している。

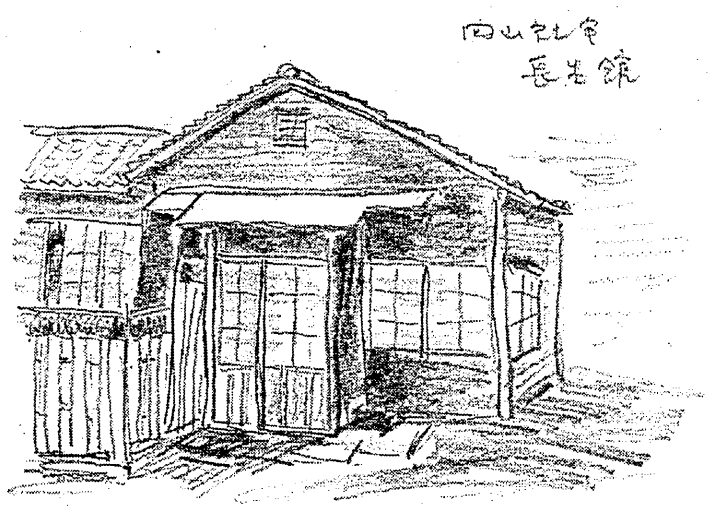
このようにみてくると、炭鉱というのは、いったい何だったんだろう、とまた思う。

強制連行された朝鮮人は、われわれ以上に深い悲しみと激しい憤りに身を震わせながら、戦後から四十三年過ぎたいまもなお、炭鉱と、炭鉱でのありし日々のことを思い出しては、拳を固めているに違いない。

いったい朝鮮人はいつごろから三池炭鉱に連れてこられていたのか。

『近代日本炭鉱労働史研究』（一九四八年十月、草風館）の「第五章、戦時炭鉱労働事情」で、田中直樹は、三池炭鉱について次のように記している。

「縁故募集によって坑夫不足も充してきた三井三池も遂に昭和十七年の初頭から朝鮮人坑夫の採用を余儀なくされる。」と。



カットも筆者

ところで、この田中直樹の記述はちょっとおかしい。三池炭鉱の資料『昭和十七年九月調べ』によると、昭和十五年下期（十月から昭和十六年三月）には、すでに万田坑で使役されていることが記録されている。

四山鉱で使役されはじめたのも昭和十六年下期からで、その宿舎が「原万田導僧合宿寮」である。二階建てのその広さから割り出してみると、およそ百人ほどの収容人員ではなかったか、と推計される。そのあと、この収容所は増築されて、およそ二百五十人ほどの朝鮮人が収容されることになる。

四山鉱関係では、二頭山に寄った社宅を改造し、昭和十九年から収容しはじめる。収容所は三棟から成っていた。収容人員は、その社宅の広さから推計して、およそ百十人ほどであったとみられる。

食べて健康をつくる ⑭

納豆で脳卒中を防ぐ

納豆のホットニュースがとび出してきた。

「納豆で脳卒中予防?!」

「納豆、血栓を溶かす」

「心筋梗塞予防に道」

以上は、四月初旬の新聞各紙に踊った、センセーショナルな見出しである。

宮崎医大生理学教室の須見洋行助教授が発表した研究につけられたもので、それによれば納豆をよく食べると、脳卒中や心筋梗塞を予防できる可能性が高いという。

どちらも、日本人にとっては死亡率の高い成人病であり、たいへんな朗報。納豆の売れ行きも各地で急増している。

脳卒中や心筋梗塞の主な原因は血栓。血管内にできる血液のかたまりが血栓で、血管をふさいで血行をストップさせてしまうだけに危険だ。

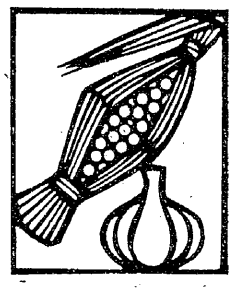
血栓は、脂肪やカロリーのとりすぎが主因で、欧米の先進国に多い症状であるが、食生活の欧米化によって、日本でも急増している。

このやっかいな血栓を溶かす酵素が、須見助教授によって発見されたのである。血栓を溶かす酵素が含まれているのは納豆だけで、しかも、ネバネバの中に多いという。

須見助教授は、この酵素を「ナットウキナーゼ」（納豆線溶酵素）と命名した。

実は、納豆が脳卒中の予防によいということわざが、東北地方に古くから伝わっていたが、今回の発表によって、科学的に裏付けられたわけである。

同じく新聞各紙に、ニンニクにも血栓を防ぐ作用があると、日大農獣医学部農芸科学科の有賀豊彦助教授らによって発表された。したがって、脳卒中や心筋梗塞を、より強力に予防するためには、納豆に少量のニンニクを薬味に使えば、いっそう効果がありそうである。



くらしを考える

歯の健康

六月四日は虫歯予防デーですが、定期的に学校で検査を受ける小学生と違って、大人はつい歯医者さんとは疎遠になりがちです。毎年六月を健康診断の月と決めて、虫歯のない人でも歯こうを取ってもらいに行くと、虫歯を防ぐことができます。小さな虫歯は、早めに発見できれば、少しの治療で済みます。

毎日使う歯ブラシも、大小、材質もいろいろあり、電動のものは少々値がはりますが、歯槽膿漏の予防に効果的です。虫歯は、それと知らず他の病気の要因にもなりますので、自分に合った歯ブラシで、しっかりみがき、歯を健康に保つようにしましょう。